「今日の説教、聴き手のために」　2008/9/28　明治学院教会(128)

（このプリントは毎週作っているものです）　岩井健作

「四人の人に運ばれて」

マルコ福音書２章１節－１２節

1、「四人の人に運ばれてイエスのもとに来た中風の者が癒された」お話は、「人々は皆驚き・・・神を賛美した。」(11)とあるように、イエスにまつわる「驚くべき出来事」であればこそ、語り伝えられ、文書伝承となり、編集文書・そしてマルコ福音書となって私たちの手にある。韓国の神学者、宗泉盛（ソン・チョンソン）氏は「神の支配とは本質的に物語である・・・・それは広がっていく物語であって、抽象化し、規定する概念ではない。・・・イエスを神学的概念や定式に包まないで、イエスの物語をつげる道を選んだ・・福音書の記者たちに感謝しなければならない。」という。「福音」を概念で纏める叙述の仕方はある。例えば、ヨハネ第一の手紙の４章７節から１０節。名文である。「愛なき者は、神を知らず、神は愛なればなり」。しかし、その「愛」を「壁の中の愛」と新約聖書学者シュタウファーは言った。概念に「福音」は盛切れない。物語がその限界を破っている。

2、イエスは疎外され、差別され、抑圧され、貧しくされ、病を負わされた人々を愛された。「愛」はそれに関わる人との物語として語る以外には語れない。「中風の者に、『あなたの罪がゆるされる』と言うのと『起きて床を担いで歩け』というのと、どちらが易しいか」とあるが、律法学者たちには『罪をゆるす』というテーマは、『神を冒涜する』事であり、死罪に当たる大事件だった。事実、イエスはこのことが引き金で殺された。しかし、イエスには、病める人の病から解放が問題であった。律法議論を中心とする者を退けられた。この物語では、「四人」や「屋根をはがして穴を開け・・床を釣り下ろした」という細部の熱意が大事なのであって、その意味では歴史の中での一回的物語である。

3、私が理事を務めてた社会福祉法人の理事会では聖書を読み、祈りが捧げらていた。担当の宣教師はいつも的確な聖書テキストを選んでいた。この２章を読んだ。「四人」は、介護福祉士、看護師、ヘルパー、医師、理学療法士、施設長、事務職員、運転手、掃除人、施設管理技師、などなどの協力を意味した。職員は、利用者をイエスへと運んでいるのか。途上の困難を「屋根をはがして穴をあけ」るほど大胆に行っているのか。今日イエスのところにつれてゆけば「いやされる」という意味を把握して、確信を抱いているだろうか。職員の研修で栄養士は利用者の食事での人間性の回復の努力を発表した。食材の仕入れ、価格、調理、運搬、食堂の雰囲気。食事が人間性の解放につながって行くための哲学、信仰、研究、協力、祈りがどれ程大事か。それはイエスに向かう「四人」の道程を意味するものであった。　一人の人間の「魂の解放」「人間としての自由」「人間としての自律」「助け合った共に生きる喜び」など、福祉の現場での証しと重ねて、このテキストを読んだことは貴重な経験だった。今、福祉や医療が、新自由主義の競争原理に丸投げされている中で、その証しは「驚くべき出来事（奇跡）」でもあった。「中風で倒れる」に象徴される倦み疲れる経験の重さの中で、「四人」のようにイエスの従いたい。